



本ができるまでの道程 — 『土佐日記』 随談 —

総合文化学科 教授 西山秀人

8月末に角川学芸出版より『ビギナーズ・クラシックス 土佐日記（全）』（角川ソフィア文庫 83）を上梓しました。『土佐日記』は承平4年（934）土佐守の任期を終えた紀貫之が、京の自宅に着くまでの55日間の旅を描いた日記文学で、古典教材としては定番の作品です。

**男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。**

日記といえば男性が漢文体で記した公務の記録を指した当時、女手と呼ばれる仮名文で日記を著すという試みは、きわめて斬新なものでした。貫之はあえて女性仮託という手段をとることで、官僚としての自分を解放し、自由な立場から新しい文学を創始したかったのでしょうか。このように『土佐日記』は女性の視点から書かれたものであるだけに、随所に虚構が織り交ぜられています。本作品が日記文学と呼ばれるのは、単なる旅の記録ではなく、創作的な要素を多分に含み持っているからだといえましょう。

さて、本書の執筆にあたっては、『土佐日記』の基本文献にあらかた目を通しましたが、入門書を手がけるのは初めのことで、どこまでかみくだいて説明すればよいのか、ずいぶん悩みました。その間に他の原稿も仕上げなければならず、新年度の学務にも忙殺され、腰を据えて原稿に着手したのはゴールデンウィーク前のことでした。

最初に章立てを考え、次いで原文を校訂し、通釈をつけていきました。作品自体は地味な内容なので、せめて見出しだけでも面白くしようと考え、「○月△日」という日次の章立てをやめ、「押鮎にキッス!」「白波」はNGワード「淡路のおばあちゃん復活」のように思いっきりポップな章段名をつけました。編集部からは「かなりイケてます」とお褒めのこたばを頂戴しましたが、もしも天国の貫之が知ったら激怒するかもしれません。

以上の基礎作業が終わると、今度は章段ごとに寸評を書かなければなりません。寸評は本書の要であり、編者の腕の見せどころでもあります。とにかく時間がなかったので、どさくさにまぎれて自分の書きたいことを好き勝手に書いたという趣きです。たとえば、

そして二月四日、ついに作者は爆発する。「何よこの楯取は！ バッカじゃないの！」と言わんばかりの語気である。

目次

CONTENTS

本ができるまでの道程 — 『土佐日記』 随談 —	総合文化学科 教授	西山秀人	1
武田泰淳と都市伝説 — 『第一のボタン』 と第二ボタン —	幼児教育学科 教授	長田真紀	3
「自閉する言葉、つなげる言葉」	総合文化学科 専任講師	上石田麗子	4
図書館司書課程を履修して	総合文化学科 2年	宮川美葵	5
「様々な絵本との出会い」	幼児教育学科 2年	海瀬共見	5
図書館実習報告	総合文化学科 1年	高寺香菜	6
本のある空間	幼児教育学科 1年	松浦ユキ子	6
前館長・塩入秀敏先生を悼んで	総合文化学科 教授	大橋敦夫	7
図書館ニュース			8



# 武田泰淳と都市伝説

## —『第一のボタン』と第二ボタン—

幼児教育学科 教授 長田 真紀

都市伝説と呼ばれる類いの話柄がある。「口裂け女」や「トイレの花子さん」のように長期間にわたって全国的に流布しているものもあれば、ひとつの学校だけといったごく小さな集団のみに伝わり短期間で消滅していくものもある。先日、某所からの問い合わせによって、戦後派作家の武田泰淳に関わるある説が都市伝説としてインターネットの世界でまことしやかに広まっていることを知った。

その話というのは、中学や高校の卒業式の日に女子生徒が憧れの男子生徒から詰め襟学生服の第二ボタンをもらうという風習は、武田泰淳の小説のなかに、戦死した兄に次いで特攻隊員として戦地に赴く弟が、思いを寄せていた兄嫁に自分の形見として心臓に一番近い軍服の第二ボタンを渡すというエピソードがあり、この話を教師が生徒に語ったことで広まった、というものである。

結論からいうと、武田泰淳の小説にそのような話が書かれたものはない。そもそも当時軍服というものは天皇から賜ったものであり、それをボタンひとつであっても勝手に女に渡すなどということとはありえないことである。また武田自身、日中戦争に兵士として出征した重い体験を背負っており、軍服のボタンを甘ったるいものとして作品のなかで使うということは考えられない。ではなぜ武田泰淳が制服の第二ボタンに結びつけられてしまったのだろうか。実は武田泰淳には『第一のボタン』という小説が存在するのである。ここで、執筆の経緯も含め作品の紹介をしてみたい。

昭和23年(1948)1月26日、帝國銀行椎名町支店に東京都衛生課ならび厚生省厚生部医員を名乗る男が訪れ、近所に集団赤痢が発生したからその予防薬を飲んでもらうことになったと説明し、青酸化合物の液体を行員に飲ませ12人を毒殺し現金と小切手を強奪するという事件が起きた。これは、敗戦後の占領下で起きた不可解な事件のひとつ、いわゆる帝銀事件である。松本清張がこの事件に強烈な関心を持ち、『小説帝銀事件』(昭和34年)や「帝銀事件の謎」(『日本の黒い霧』昭和35年)を書いたことは有名である。

武田泰淳もこの事件に触発され、時を置かず同年5月に評論「無感覚なボタン—帝銀事件について—」(初出誌「文藝時代」)を発表する。武田はこの事件で被害者が、特定の恨みや憎しみとは全く無関係に、たま

たまその場に居合わせたことによって殺害されたという、犯罪の無意味さ、偶然性、無意識性、そして犯人と被害者の無関係性に戦慄を覚える。それは、ドストエフスキーの『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフが、高利貸の老婆を斧で殺害した直後、そこへ帰宅した老婆の腹違いの妹をも予期せぬまま殺してしまったことの無意味さに通じるものであり、また同時に、『罪と罰』の殺人がもつ一対一の緊迫した切実さに比べ、自覚なきままに集団を殺戮してしまうという無感覚さがこの事件には充満していると述べる。

この問題を小説化したのが『第一のボタン』(昭和25年10月～26年7月、4回にわたって雑誌「別冊文藝春秋」に連載)である。ただし、松本清張とは違い、帝銀事件そのものを作品化したわけではない。

平凡な一市民で陶器絵師であったスズキは、軍事省の将校が自分の妹に乱暴しているのを目撃し、斧でその将校を殺害してしまう。すぐさま死刑宣告を受けるが不思議なことに執行直前に釈放され優遇される。スズキはB一号と命名され軍の特殊任務を遂行することを求められる。それはたったひとつ、小さな白いボタンを指で押すことだった。その仕事の意味を知らされぬままスズキはボタンを押す。ようやくこれで責任を終えたという安堵と虚脱感に浸っているのもつかのま、実はそのボタンは、敵国の首都を一瞬にして全滅させる新兵器のスイッチだったことを教えられる。驚愕のあまりスズキは失神する。一夜明けると「二十世紀最大の英雄スズキ少佐」として祭り上げられ、次第に特権をもつ幹部のひとつとして軍事省の機構に組み込まれていく。その国では人民は常に政府によって監視され、さまざまな薬物注射を強制され、特権を行使できる支配階級と一般労働者は明確に区分され、個人主義は徹底的に排除されている。永久館なる場所では、戦死者・死刑囚の区別なくすべての死体が毛髪から内臓にいたるまで有用な戦時物質として加工され、動物園では動物がみな人間に都合がよいように改造されている。……

この作品の時代設定は1990年であり、武田が執筆した時から40年後の国家を描いた近未来の風刺小説である。『第一のボタン』は未完ではあるものの、イギリスのジョージ・オーウェルの代表作『1984年』(1949)や、それより早い1920年から21年にかけて執筆されたソビエトのエヴゲーニィ・ザミャーチンの

『われら』と同様に、全体主義の軍事国家、監視国家の恐怖を描いたものとしてもっと評価されてしかるべき作品なのである。

このように、『第一のボタン』のボタンは新兵器のスイッチのことであり、制服のボタンとは全く関係がない。ボタン違いである。おそらく、「第二ボタン」をインターネットで検索する過程で武田泰淳の『第一のボタン』という作品名が引っ掛かり、作品そのもの

は読まぬまま、第二を溯れば第一だということになってしまったのではないだろうか。特攻隊員として出撃する前に云々という話を、戦争という視点で戦後派作家武田泰淳と結びつけようとしたのは全く理解できないわけではないが。

さまざまな手段によって目的に近づいたと思った時、最後はきちんと自分の眼で確認するということが大切である。

## 「自閉する言葉、つなげる言葉」

総合文化学科 専任講師 上石田麗子

2、3年前、英文学専攻の大学院生で、「人間にとって言葉とは何か」という問題に没頭していた時期、ポール・オースターという現代アメリカ作家の短編小説「ガラスの街 (City of Glass)」(1985年)を授業で読んだ。この作品は、一見推理小説の結構を取る。ウィリアム・ウィルソンのペンネームで探偵マックス・ワークが活躍する推理小説を書くダニエル・クイン (Daniel Quinn) というニューヨーク在住の作家が主人公である。偽名で書く小説の主人公に自らの生を仮託して生きる彼の存在形式は、二重三重の虚構によって成り立っている。クインの頭文字D.Q.は、あの「騎士道物語を読みすぎて妄想に陥り、自ら騎士となってサンチョ・パンサと遍歴に出た」ドン・キホーテ (Don Quijote) を想起させる。そのクインは一本の間違い電話からピーター・スティルマンという男性の父親を監視することになる。スティルマンの父親は宗教学者だったが、妻の死をきっかけに一人で息子の養育をすることを決め、2歳のピーターを屋敷の一室の暗闇の部屋に閉じ込める。それは「神の言葉」を探そうとする、言語に取りつかれた宗教学者の痛ましい実験だった。人間の言語から隔離された場所で過ごせば、バベルの塔以後分裂し始めた人間の諸言語以前に話されていた始原の言葉、神の言語を喋りだすだろうと、この気の狂った父親は考えたのだ (この父親のモデルは、私見では「言語一般および人間の言語について」(1916年)というエッセイで「一切の高次の言語は低次の言語の翻訳であって、その最高次元において、究極の明瞭さにつつまれて、言語の運動の統一性

にほかならない神の言葉がみずからを展開するのだ」という自説を展開したドイツ人思想家ヴァルター・ベンヤミンである)。

現実が虚構の言葉に乗っ取られたクインと、全ての言語を剥奪されたピーターという、二人の対照的な存在様式を軸に物語は展開していく。最終的にはピーターの父親の監視に偏執狂的に固執し極限まで追い詰められたクインが、ピーターの閉じ込められていたような暗い部屋で、事件の記録を書き込んでいた赤い帳面を、星や地球といった事件とは無関係の描写や、人類への希望で埋めていく場面で、この解決の無い推理小説は終わる。彼が最後に書き込んだ文章は、「この赤いノートのページが尽きてしまったら、何が起こるんだろう?」というものである。彼は、自分の言葉が自分とは切り離され、意味が失われ、石や湖のように、世界の一部になったように感じている。自分と、その周囲の現実を指示する手段ではなくなったときに、ことばが自己完結し、自閉する様子が描かれている。

文学を研究していると、本を読んでいるだけの時間が長くなり、現実との関与や生命の実感などが薄くなってしまふことがある。しかし同時に、ことばというのは、現実が届くため、他者と理解しあうための手段でもある。自分の発することばが、現実と乖離した空虚なものになってしまわないように、大事にしていきたいと思う今日この頃である。

## ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 図書館司書課程を履修して

総合文化学科2年 宮川 美葵

私は幼い頃から本が好きである。絵本から小説まで、私の生活には必ず本という存在が近くにあり、本は私にとってかけがえのない大切なものとなっている。

短大に入学して図書館司書課程を履修すると、私の中にあった本のイメージは大きく変わっていった。私は本は好きだったが、図書館へ行くということはほとんど無く、本といえば書店、というイメージが長く存在していた。

しかし、学習を進めていくうちに、図書館という場所は地域の人にとってとても身近で多くの人が必要としている場所である、ということが分かった。

それから私は、もっと図書館のことや、図書館司書の方がどのような仕事をされているのかを実際に体験したいと思い、公共図書館で実習をさせていただき、国立国会図書館へ見学に行った。また、インターンシップでは、自分の母校である小学校の学校図書館で、学校図書館司書教諭の見習いとして実習をさせていただいた。これらの体験を通して分かったことは、利用者

と図書館司書の立場は大きく異なり、図書館司書は利用者のどんな質問や要望にも対応ができるように、常に変化しているさまざまな情報を把握している必要がある、ということであった。また、利用者が気持ちよく本を閲覧することができるような環境を整えることも、重要な役割のひとつであることを実感した。

図書館で実習をするということは、普段の短大での学習とは異なり、図書館の雰囲気や自分の肌で直に感じて体験することができるという、滅多に経験することのできないとても貴重なものであった。

この経験を活かして、私はこれからも本を大切にする気持ちを持ち続けていきたい。



## ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 「様々な絵本との出会い」

幼児教育学科2年 海瀬 共見

私の家には絵本が多くあり、幼い頃は自宅の絵本をたくさん読んでいました。小学校・中学校・高校と年を重ねるごとに、絵本を読むことは無くなってきました。

私は一年前、この上田女子短期大学の幼児教育学科に入学し、保育者の夢に向かって今まで勉強に励んできました。保育の勉強をする中で、子どもたちと生活する上で必ず必要になる絵本の読み聞かせの勉強もしました。読み聞かせの勉強をするために、本学の図書館を利用することが何度かありました。絵本を読むことは本当に久しぶりで、年齢に合った絵本はあるのか、どのような絵本

を選べば良いか等解らないことが多かったのですが、図書館へ行ってみると、著者別に絵本が分かれていて、たくさんの絵本があり、とても

選びやすいと感じました。また、物語を楽しむだけの絵本だけでなく、見て楽しむ絵本や触れて楽しむ絵本、飛び出す絵本や仕掛けのある絵本等今までに見たことの無い絵本がたくさんあり、絵本の楽しさを実感することができました。

今年の私の誕生日に、母から一冊の絵本を貰いました。その本は、三浦潤一著『おにいちゃんとのやくそく』という絵本で、主人公の女の子のお兄ちゃんが交通事故で亡くなってしまのお話でした。私はこの絵本を読み、とても感動し、命の大切さについて改めて考えることができました。それと同時に、言葉で伝えると難しいことも、絵本で見たり聞いたりすることで伝わりやすくなるのが解りました。

私が保育者として現場で働くときは、子どもたちにたくさんの絵本を読み聞かせたいと思っています。読み聞かせによって子どもたちに絵本を好きになってもらい、また絵本を見たり聞いたりすることで、言葉で伝えることが難しい事も伝えていきたいと思っています。



## ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 図書館実習報告

総合文化学科1年 高寺 香菜  
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

私は、夏季休暇期間中の9月5日～10日に、上田情報ライブラリーで図書館実習をさせていただきました。実習の内容は以下のとおりです。

### 【1日目】

開館前準備（新聞交換等）、配架、カウンター（貸出・返却処理、パソコン貸出等）、ブッカーかけ、本の修理  
《感想》ブッカーかけや本の修理は細かい作業で難しかったのですが、丁寧に出来ました。

### 【2日目】

開館前準備、配架、カウンター、図書の入れ替え、書庫整理、図書登録・利用者登録  
《感想》図書登録や利用者登録の細かい確認作業をしっかり出来ました。

### 【3日目】

開館準備、配架、カウンター、書架整理、「仕事録セミナー」参加…団塊の世代の皆さんが退職後、自分史を書くためのサポートをするセミナー。  
《感想》「仕事録セミナー」に参加させていただき、図書館の新しい一面を見ることができました。

### 【4日目】

開館前準備、配架、カウンター、新着図書受入、予約・リクエスト本チェック、絵本講座見学…信州大学繊維学部の方による、絵本作り講座、テーマ本コーナー作り…時期に合ったテーマの本を集めたコーナー。

《感想》テーマ本コーナーは、お客様に手に取ってもらえるように配置したり、飾り付けたりと、色々工夫をしていることを知りました。

### 【5日目】

開館前準備、配架、カウンター、新着図書受入、予約・リクエスト本チェック、テーマ本コーナー飾り付け  
《感想》カウンターの仕事を長時間担当しました。そのおかげで貸出や返却作業だけでなく、様々な対応が少しずつ出来るようになってきました。

### 【6日目】

開館前準備、配架、カウンター、図書探し、雑誌装備  
《感想》不明図書を、見つけることが出来ました。

瞬間に過ぎてしまった6日間でしたが、カウンター業務のほかにも、ブッカーかけや本の修理、図書の受入等、様々な業務を体験させていただき、すべてがとても良い経験になりました。

また、司書の方から、有益なお話を数多く聞くことが出来ました。例えば、お客様の求めている本を探し出せるよう、上手に質問をして、検索に必要なキーワードを聞きだすことも、大切なことだと教えていただき、自分の知識がさらに深まりました。

この実習で経験したことや学んだことを、これからの学業に役立てていきたいと思います。

## ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 本のある空間

幼児教育学科1年 松浦ユキ子  
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

私は本のある空間が好きです。

現在、私は上田女子短期大学の附属図書館をよく利用しています。実習の準備に絵本や紙芝居を借りたり、授業で学んだことを更に調べたり、心がおもむくままに歩きまわり、新しい発見をしながらおもしろそうだと感じる本を探して自由に過ごせるこの空間が気に入っています。

また地下の書庫にはたくさんの画集や文学書、専門書、そして雑誌のバックナンバーがファイルに綴じ保管されています。書庫で人に会うことはほとんどありませんが、私はここでふらふらとヒントになる本はないかと探し歩いています。ヒントになるというのは、私に関心をもっている研究のテーマに関連したことが、別のかたちで捉えられているのではないかと感じています。他の人が表現しようとした世界にどっぷりとつかり感じ入ることも楽しく好きな時です。

初めての幼稚園実習で、4歳児の男の子に絵本『そらまめくんのベット』を読んでと言われました。この絵本はそらまめくんのさやのベットがある日、うずらの卵の巣に使われてしまい、そらまめくんは雛がかえるまでベットを貸して見守るという内容です。そしてその後だれにも貸してあげなかったベットで友達のいろいろなまめと一緒に寝るようになるお話です。読み終えた後も男の子は繰り返し絵本を見ていました。お母さんのお腹にいる兄弟のこと、お兄ちゃんになる喜びと心細さ、様々な自分の気持ちを絵本に照らし合わせているようでした。絵本が子どもの心の支えになることを実感しました。私も保育者としてたくさんの本を子ども達に読んであげたいと思います。読み聞かせしたり、一緒に読んだりして、子ども達が空想の世界で想像力豊かに絵本との関わりを楽しめるよう、私自身も朗読の表現力を付けていきたいです。

## 前館長・塩入秀敏先生を悼んで

急逝から半年余りたった今でも、キャンパス内ではその事実を受け入れ難い思いで過ごしています。短大の歩みとともに、人生を積み重ねられてきた塩入秀敏先生は、『みすず』の前身である『図書館だより』第1号から、おりおり寄稿されてきました。そこで、今回あらためて誌面をお借りし、その足跡を振り返ることで、読者の皆様とともに先生を悼むよすがとしたいと思います。

### ◆学究へのスタート（「私の読書 文庫本の巻」）

学生時代、文庫本はよく読んだ。国文か将又歴史か専攻の選択を決めかねていた頃、古今東西分野に関係なく、そして体系もなく文庫本をむやみやたらに読んでいて、岩波文庫『平家物語』上下二冊を読んだ。古代の没落と中世の成立を哀調深く語る『平家物語』は、私を捉えて離さなくなってしまった。その時である「よし日本古代中世史をやろう」と決心したのは。（『図書館だより』第1号 1974.2.1）

### ◆語呂合わせ（「中国見聞録 其一」）

China（中国）に行って china（陶磁器）を見てくることを個人テーマとしての訪中（『図書館だより』第7号 1979.12.1）

### ◆酒の嗜み（「酒のみの詩」）

酒は嫌いではない。万止むを得ないつきあい酒も結構あるので、飲む回数は意外に多いのかもしれない。さりとして、たとえ僅かでも毎晩飲まずにはいられない程好きでもない。しかし、酒のみの詩人・詩人たちや、彼らが読んだ詩や歌は文句なく好きである。（『図書館だより』第9号 1982.12.1）

### ◆知的生活（「わたしのヘンリ・ライクロフト氏」）

南イングランドの片田舎に隠栖して、牧歌的な自然に囲まれて四季のうつりかわりを楽しみながら、静かな余生を散歩と読書とさまざまな思索にふけりつつ暮らした彼が好きだったのは、無為徒食の学生だったからであろう。今や、それは老後の夢である。けれども、本や読書について言えば、今でも彼が好きである。（『図書館だより』第17号 1990.12）

### ◆館長としてのメッセージ①（「脳の活性化には読書がいちばん」）

本年4月、館長に就任しました。（中略）図書館では、皆さんの足が向くように快適で親しみやすく使いやすい図書館づくりに努めますので、皆さんには大学生らしく脳を活性化させる読書をたくさんしてもらいたいと思います。（『みすず』No.29 2002.12）

### ◆館長としてのメッセージ②（「本は身銭を切って買え」）

立場上、「図書館の本を読め」と言わなければならないところだが、個人的には「本は身銭を切って買って読め」と言いたい。学生時代に、乏しい仕送りの中から、その1割ほどを絞り出して初めて買った専門書は、私にとってほかの雑書とは全く違う存在だった。書棚では特別の場所を占めて鎮座ましましていたし、冒頭の数行を暗唱できるほど読み込んだものだった。（『みすず』No.31 2004.12）

### ◆館長としてのメッセージ③（「早く読まないで大人になっちゃう」）

『吾輩は猫である』は夏目漱石の代表作の一つだが、私は2回しか通読していない。1回目は中学生の時だった。その時は（中略）面白くなかったのである。2度目は30代半ば過ぎだったと思うが、主人公やほかの登場人物と年齢が近かったせいもあって、今度はおかしさよりも面白さや感慨を感じるようになっていた。名作でも読まれるべき年齢・時期があることがよく分かった。3度目は、多分面白くないだろうと思っている。（『みすず』No.32 2005.12）

以上のように、先生の『図書館だより』『みすず』へのご寄稿は7点です。このほか、附属図書館には、先生の編で、本学発行の『上田盆地の民話 母と子のための民話集』（1977.9）があり、近年、お力を注いでいらした塩田平民話研究所のお仕事の原点を見る思いがします。（大橋敦夫）

# 図書館 ニュース

## 第8回 七夕文学賞

◆恒例となりました七夕文学賞も、  
本年は左記のみなさんの作品が受賞となりました。

### 優秀賞

自由詩

総合文化学科 一年 岡田 早耶香

七夕

窓から見上げた  
夜空一面に広がる  
二人の引いた白銀のカーテン  
少しさびしいけれど私は  
再会した二人の幸せを祈りながら  
そっとカーテンを引いた

### 佳作

自由詩

総合文化学科 一年 清水 由惟

七夕

天には輝く星があふれ  
地には熱い願いがあふれる  
それは  
地球に光が満ちあふれる日

### 佳作

自由詩

幼児教育学科 一年 土屋 由美

かえるの願い

天にいる二人のことを思って  
今日もかえるは鳴いております  
会わせてあげてください  
二人にかわって  
今日もかえるは鳴いております

※選考・添削は、長田真紀先生にお願いしました。



## 図書館を 身近な場所に

附属図書館司書  
筒井 貴子

四月から図書館で仕事を  
しています。皆さんの明るい  
笑顔と「こんにちは」の  
声を聞きながら心地良い毎  
日を送っています。  
書架を眺めると、あの本  
もこの本も読んでみたくな  
ります。それぞれの本には  
自分が知りたい何かが書い  
てありそうに思えてくるか  
らです。でも本を読むには  
時間が必要で、速読でも身  
につけられたら今の何倍も  
の本が読め、どれだけの知  
識を身につけることができ  
るものか、と思うこともあ  
ります。でも読んで本  
の内容を覚えておくことが  
できればの話です。です  
から必要な時に必要な資  
料が手に取れる図書館が身  
近にあるという事は、なんて  
心強い事だろうといつも実  
感しています。  
図書館の利用目的は本当  
に様々です。必要な資料や  
読みたい本を探すこと、好  
きな音楽を見つけたりDV  
Dを見たり、新聞や雑誌を  
読んだり、そして一番いい  
なと思うのが「ただなんとな  
く」です。今まで気付か  
なかつた何かを見つけるこ  
とができるかもしれない。  
図書館を気軽に身近な、  
そして頼りになる場所にし  
て下さい。

## 編集後記

a postscript by the editor

『みすず』第34号をお届  
けします。原稿を寄せられ  
た西山先生、教員・学生の  
皆さんありがとうございます。  
今号P.7で前館長の塩入秀  
敏先生を偲びました。研究  
室のお片づけを手伝った方  
は塩入先生が部屋の整理  
を日頃からきちんとして  
いたのだらうと、感銘を受  
けたそうです。筆記用具は  
種類別、本も書き込みや折  
跡がなくきれいに並んで  
いたそうです。感慨ひとし  
おです。  
(S)

## みすず

第34号

上田女子短期大学附属図書館報  
2007.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館紀要委員会  
発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620  
Tel: 0268-38-6019 Fax: 0268-38-6019  
E-Mail: lib@uedawjc.ac.jp